

顕現と空性：『知見の歌』研究（1）

根本 裕史

1 序

本研究は、18世紀に活躍したチベット学僧チャンキャ・ロルペードルジェ（Lcang skya rol pa'i rdo rje: 1717–1786）の『知見の歌』（*Lta mgur*）およびジャムヤンシェーパ2世クンチョク・ジクメワンポ（Dkon mchog 'jigs med dbang po: 1728–1791）による註釈『言葉の灯火』（*Tshig gi sgron me*）の解説を通じて、チベット中観思想の展開の一端を探るものである。

『知見の歌』の特色、著作経緯、関連文献については前稿（根本 2017）に示した。本稿では註釈『言葉の灯火』の科文（sa bcad）を参考にして作品全体の構成を示した後、『知見の歌』の中心をなす「顕現と空性の連合」（snang stong zung 'jug）という思想の特徴を明らかにし、その思想が説かれる『知見の歌』の前半部（vv. 1–12c）およびそれに対する註釈『言葉の灯火』（1b1–7a2）の翻訳研究を提示する。

2 『知見の歌』の内容構成

『知見の歌』は、空性の隠喩である〈母〉¹、縁起の隠喩である〈兄〉と〈父〉、作者自身の投影である〈愚息〉を題材とし、縁起と空性の一体性の真実を歌にして表現した作品である。チャンキャが語っているのは、およそ縁起するものは空であり、空なるものこそが縁起するという、ナーガールジュナ（Nāgārjuna: ca. 150–250）に由来し、チベットのツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419）によって精緻に論じられた中観の思想である²。

チャンキャは『知見の歌』において空性と縁起の思想を中心に語った後、彼自身が属するゲルク派の他の学者達、インドの中観派以外の仏教徒の論師達、チベットの他宗派（サキャ派、ニンマ派、カルマ・カギュ派、ドゥク・カギュ派等）の学者達に対する批判を展開し、結びに廻向の言葉と、正しい知見を得た自身の喜びを綴っている。

『知見の歌』の内容構成を理解する上で参考になるのが、クンチョク・ジクメワンポの註釈『言葉の灯火』の科文である。以下に科文の一覧表を示す。

A1 klad kyi don |（冒頭部の意味）[2a4]

B1 mchod brjod |（敬礼）[2a4]

B2 rtsom par dam bca' ba |（著作宣言）[2b2]

A2 gzhung gi don |（本論の意味）[2b4]

B1 mdor bstan pa |（略説）[2b4]

B2 rgyas par bshad pa |（詳説）[3a3]

C1 dbu ma chen po snang stong zung 'jug gis brgyan te bstan pa |（〈顕現と空性の連合〉によって装飾された大中観の説示）[3a4]

¹クンチョク・ジクメワンポは空性を「母」という隠喩で表現する根拠を般若経に求めている（*Tshig gi sgron me* 3a2f.）。翻訳研究を参照。

²MMK 24.18: yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatām tām pracakṣmahe | sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā ||（「縁起とは空性であると我々は語る。その〔空性〕は他に依存して概念設定されたものである。まさにそれが中道である」）VV 85.14f.: yaḥ śūnyatām pratītyasamutpādaḥ madhyamām pratipadaḥ ca | ekārthām nijagāda prañamāmi tam apratibuddham ||（「空性と縁起と中道は同義であるとお説きになった比類のない仏陀に私は敬礼する」）空性と縁起の同義性に関するツォンカパの見解については根本 2016: 106ff. を参照。

- D1 chos thams cad stong pa'i nmam 'gyur du ngo sprod pa | (一切法は空なるものの変容態であるという説の導入) [3a4]
 E1 dngos kyi don | (目下の主題の意味) [3a5]
 E2 'khor ba las grol ba stong pa nyid la rag las par bstan pa | (輪廻からの解脱は空性に依存するという教え) [4a2]
 F1 'khor ba las grol ba stong pa nyid la rag las par bstan pa | (輪廻からの解脱は空性に依存するという教え) [4a2]
 F2 grol ba'i gtan tshigs | (解脱の根拠) [4b1]
 D2 snang stong zung 'jug tu ngo sprod pa | (〔一切法は〕〈顕現と空性の連合体〉であるという説への導入) [4b3]
 E1 dngos kyi don | (目下の主題の意味) [4b3]
 E2 stong pa nyid ngos bzung ba | (空性の同定) [5b6]
 D3 stong nyid rgyud steng du ngo sprod pa | (〔作者自身の識〕相続への空性〔説〕の導入) [6a3]
 E1 dngos kyi don | (目下の主題の意味) [6a3]
 E2 rang re'i rjes 'brang 'ga' zhig gi 'khrul ba dgag pa | (ある自派〔ゲルク派〕の信奉者の誤解の否定) [6a6]
 C2 grub mtha' smra ba gzhan gyi 'dod pa brjod pa | (他の学説論者の主張の陳述) [7a2]
 D1 dngos kyi don | (目下の主題の意味) [7a3]
 E1 rgya gar mkhas pa rnams kyis bzhed pa'i tshul | (インドの諸学者による主張の内容) [7a3]
 E2 bod snga ma rnams kyi 'dod pa brjod pa | (昔のチベット人達の主張の陳述) [7b6]
 D2 dgos med kyi dogs pa gsal de yang dag pa'i don la bag phebs par gdams pa | (不要な疑いを払拭して真実の意味に基づいてゆったりと構えるべきであるとの教授) [8b2]
 D3 bzod par gsol ba | (寛恕の請願) [9a6]
 C3 rang nyid kyis zab mo'i lta ba ji ltar btsal ba'i tshul | (自分自身が甚深なる知見を探求した方法) [9b3]
 D1 gzhung gang la brten nas btsal ba | (いかなる論書に依拠して探求したか) [9b4]
 D2 btsal nas rnyed pa | (探求に基づく〔甚深なる知見の〕獲得) [9b6]
 D3 rnyed pa'i bka' drin rjes su dran pa | (〔甚深なる知見の〕獲得に関わる恩恵の随念) [10a3]
 A3 mjug gi don | (終結部の意味) [10b1]
 B1 dge ba bsngo ba | (善の廻向) [10b1]
 B2 lta ba rnyed pa la yid rang ba | (知見獲得の喜び) [10b4]
 B3 sbyar byang smos pa | (著作の結びの言葉) [10b6]

クンチョク・ジクメワンポは、チャンキヤが様々な詩的技巧によって語る空性と縁起の一体性を、「顕現と空性の連合」(snang stong zung 'jug) という概念によって説明する。上掲の科文一覧における「C1〈顕現と空性の連合〉によって装飾された大中観の説示」[3a4–7a2]の節がこれに該当する。

3 顕現と空性

註釈者クンチョク・ジクメワンポは「顕現」を意味する snang ba という語を、知に事物が立ち昇ること、または知に立ち昇る事物の意味で用いている。彼にとって、事物はそれを指定する知に依存して成立し、その結果として知に顕現するものであるので、事物が顕現することはそれが縁起すること(rten 'byung / rten 'brel, 「他に依存して成立すること」)に基づく³。およそ縁起(知に依

³ツォンカパは『道次第大論』において、諸事物は言語的活動に関わる知(tha snyad pa'i shes pa)に依存して指定され、成立すると説く(Lam rim chen mo 425b2ff.; 根本 2016: 51f.)。チャンキヤ・ロールペードルジェは『縁起讃』註釈において、これこそが帰謬論証派に独自の縁起思想であるとの見解を示している(Bang mdzod 16a1ff.; 根本 2016: 58ff.)。

存して成立）し、知に顕現するものは、それ自身に固有のあり方（rang bzhin, 自性）⁴を欠いた空なるもの（stong pa）である。およそ顕現する事物は全て空であり、空なる事物こそが知に顕現する。それゆえ、クンチョク・ジクメワンポは、諸事物は「顕現と空性の連合体」であると説明する。

クンチョク・ジクメワンポにとって重要な考えは、諸事物は空性の変容態（stong pa nyid kyi nram 'gyur）であるということである⁵。彼はこの考えをチャンキヤの『知見の歌』の次の一節から読み取っている。

「この多様な所取・能取は〈母〉の微笑み、この生死と移ろいは〈母〉の虚言である。欺くことのない〈母〉によって私は欺かれた。かの縁起という〈兄〉が守ってくれることを願う」
[3cd-4ab]⁶

〈母〉は空性の隠喩である。能取・所取、業と煩惱によってもたらされる生死、苦楽の移ろいは、いずれも自身に固有のあり方を欠き、それらを指定する知に依存して成立する。我々の意識に顕現する一切のものは等しく空であり、それらは空性の変容態である。ところが、凡夫は空性の真実を認識せず、諸事物は自身に固有のあり方に基づいて成立すると認識してしまう。それゆえ、チャンキヤは空性という〈母〉によって自分は欺かれたのだと反省的に語り、縁起という〈兄〉の教えに依拠して、善業を積み、不善業を慎み、輪廻生死の恐怖から逃れることを願っている。

さらに、チャンキヤは次のように述べ、空性こそが解脱の根拠であるとの考えを示している。

「その一方では、他ならぬ年老いた〈母〉の恩恵により解脱することを願う。まさにこの所取・能取がこの通りであるならば、三世諸仏でさえも救済する術はないのだから。

この多様な移ろいは、移ろうことのない〈母〉の変容態であるからこそ、解脱が可能なのである」[4cd-5cd]⁷

もし仮に諸事物が自身に固有のあり方に基づいて成立するならば、この世界において変化は起こり得ないことになる。その場合、煩惱は衆生の心に実在して常に存在を停止することなく、未生の智慧が生起することもあり得ないことになる。その結果、衆生は空性を現証して煩惱を断ずることが不可能であることになる。むしろ、一切の事物は自身に固有のあり方を欠き、空性という〈母〉の変容態であるからこそ、衆生は煩惱を断じて功德を積み、真実を悟り、最終的に解脱の境地に至ることが可能なのである⁸。

次に、チャンキヤは縁起と空性の相互依存（Itos grub）の関係について次のように述べている。

⁴クンチョク・ジクメワンポによれば、rang bzhin とは当該の事物 *x* を他から区別して「*x*」と概念設定するための根拠を担うものである（*Tshig gi sgron me* 3b4ff.）。翻訳研究を参照。

⁵この考えはテンダル・ランパ（Bstan dar lha rams pa: b. 1759）の著作にも現れる（‘*Dod 'jo 'i dpag bsam* 17b1ff.; 根本 2016: 108ff.）。クンチョク・ジクメワンポは「諸事物は空性の変容態である」という考えの典拠として、チャンドラキールティ（Candrakīrti: ca. 600–650）の『入中論』（MA VI 38ab）を引用する。ただし、チャンドラキールティ（および註釈者ジャヤーナンダ）は、空なる事物を原因として、空なる別の事物が生起するという見解を述べているに過ぎず、事物が「空性の変容態」であるとは明言していないので注意を要する。翻訳研究を参照。

⁶*Lta mgrur* 1b3f.: gzung 'dzin sna tshogs 'di a ma'i 'dzum bag || skye 'chi 'pho 'gyur 'di a ma'i rdzun tshig || bslu med a ma yis kho bo bslus so || jo jo rten 'byung des skyob par re'o ||

⁷*Lta mgrur* 1bf.: nram pa gcig tu na || ma rgan mo || kho na'i drin gyis ni grol bar re ste || gzung 'dzin 'di nyid ko 'di ltar yin na || dus gsum rgyal bas kyang skyobs thabs mi 'dug || 'gyur ba sna tshogs 'di gyur med a ma'i || nram 'gyur yin pas na grol rgyu 'dug go ||

⁸クンチョク・ジクメワンポによれば、この考えはナーガールジュナの『根本般若中頌』（MMK XIV 14）に由来するものである。翻訳研究を参照。

「何者としても成立せず言表し得ない〈母〉は何者にも化けるが、それらは彼女に依存し、彼女はそれらに依存する。この点にのみ理解すべきことがある。

老いた〈父〉を探し求めても見出されないことが老いた〈母〉を見出すことにまさに等しいのであるから、〈母〉の膝元から老いた〈父〉を見出すならば、恩恵深い父母が〈息子〉の私を守ってくれるという」[6-7abc]⁹

ここでも〈母〉は空性の隠喩である。クンチョク・ジクメワンポの註釈によれば、何者としても成立せず、言表し得ない空性が様々な縁起的存在(rten 'brel sna tshogs pa)に変容し、我々の意識に立ち現れる時、縁起的存在は空性に依存し、空性は縁起的存在に依存する、というのが詩節前半部の意味である¹⁰。

クンチョク・ジクメワンポは、空性と縁起的存在の間の相互依存関係を、存在論的な観点からではなく、認識論的な観点から理解している。すなわち、この二者の相互依存とは、空性という属性が縁起する事物に依存し、縁起する事物が空性という属性に依存するということではなく、むしろ、ある事物が空(自身に固有のあり方に基づく成立を欠く)であることを理解する知は、他の知に依存することなく、その事物に関して原因・結果、定義・被定義項目、行為目的・行為主体などの画定が妥当することを確定し、また、事物は縁起するもの(他に依存して成立するもの)であると確定する知は、他の知に依存することなく、その事物が空であることを確定するということを意味している¹¹。

次に、上の詩節でチャンキャは縁起する事物を〈父〉という隠喩で語っている。註釈者クンチョク・ジクメワンポはこれを「空の基体である主題」(stong gzhi chos can)として説明する。すなわち、「xは空である」という述定の主題x、例えば壺などである。世間の人々は腹部が膨らんだ物体を「壺」と概念設定する。しかし、その概念設定の根拠を論理に従って外界に探し求めるならば、「壺」という概念を与える根拠は何も見出されない。チャンキャはこのことが壺の空性—老いた〈母〉を見出すことに等しいのであると言う。さらに、壺が空であるという真実を見出した者は、それが空であるからこそ壺として変容し、意識に立ち現れることが可能であるという事実を発見する。これをチャンキャは「〈母〉の膝元から老いた〈父〉を見出す」という言葉で表現している。以上のように、チャンキャは縁起(=〈父〉)と空性(=〈母〉)の相互依存関係を説き、その二者の一体性に対する正しい理解こそが、〈息子〉の自分を常断の二辺から守ってくれると述べている¹²。

4 否定対象とその顕現

さて、以上のような空性と縁起の一体性に対する理解は、正しい中観の知見(lta ba)を得た者にのみ起こる。未だその知見の獲得に至っていない凡夫の意識には、縁起する事物が自身に固有のあり方に基づいて、実在として成立するかのように顕現するため、事物の空性を理解しない。自身に固有のあり方に基づく成立(rang bzhin gyis grub pa)あるいは実在としての成立(bden grub)が中観派の論理によって否定されるべきもの、すなわち〈否定対象〉(dgag bya)である。中観派の考察は〈否定対象〉が何であるかを正しく見極めることから始まる。

⁹Lta mgur 2a1ff.: cir yang ma grub pa'i brjod med a ma || cir yang brdzu ba yi phar brten tshur brten || 'di ka tsam zhig la go rgyu 'dug go || pha rgan btsal bas ni ma rnyed pa de || ma rgan rnyed pa kho yin par 'dug pas || a ma'i pang nas ni pha rgan rnyed pas || pha ma drin can gyis bu nga skyob skad ||

¹⁰Tshig gi sgron me 4b5f. に説明される。翻訳研究を参照。

¹¹Tshig gi sgron me 4b6ff. に説明される。なお、クンチョク・ジクメワンポの説明は、ツォンカパ、ケードゥブ・ノルサン・ギャンツォ、ダライ・ラマ七世ケルサン・ギャンツォの見解に依拠するものである。詳しくは翻訳研究を参照。

¹²Tshig gi sgron me 5b4ff. に説明される。翻訳研究を参照。

チャンキヤは、〈否定対象〉が事物とは別個に凡夫の意識に顕現するのではなく、常に事物と一体のものとして顕現するものであるという点を強調し、この点に関して誤解を抱く他の学者達を批判している¹³。

「昨今、我らの中のある聡明な者達は tshugs thub や bden grub などの術語を愛好する。彼らはそのきらきらと顕れているものを放置し、角の印がついた否定対象を探し求めているようだ。

覆い隠すものを離れた〈母〉のその尊顔に、そうしたきらきら光るものがあるという話はない。重要な点を外してあれこれの説明をつけたものは多くあるが、かの年老いた〈母〉は逃げてしまったのではないかと疑われる。

〔諸存在は〕あることはあるのだが、今のこのような、ごつごつした矛盾の集まりを抱えたものであるとは思われない。むしろ、〈父〉と〈母〉は愛情によって離れることなく、のんびりして、実に穏やかで実に幸せそうに見える。[9d-12c]」¹⁴

チャンキヤは様々な象徴表現を散りばめながら〈否定対象〉論を展開している。クンチョク・ジクメワンポの註釈によれば、この歌はゲデン派 (dge ldan pa)¹⁵すなわちゲルク派 (dge lugs pa) の学僧達が陥りやすい空疎な哲学的議論への自己批判を意図したものである¹⁶。彼らは tshugs thub (「不変性」) や bden grub (「実在としての成立」) といった密学的な術語を愛好するあまり、自分自身の意識に現に顕れている事物そのものが〈否定対象〉であることを自覚せず、事物とは別の所に、そうした術語で語られる角の印がついた (rwa can) 〈否定対象〉を探し求めてしまう。「年老いた〈母〉」は空性を示す隠喩であり、「顔」は空性を証得する智慧の隠喩である。年老いた〈母〉の顔にきらきらと (ling ling) 顕れるものが付いていないように、空性という真実を証得する智慧にそれらの事物が顕現することはない。もしきらきらと顕れて見える事物が彼らの眼前にあるならば、それこそを〈否定対象〉とするべきである。事物とは別の所に tshugs thub や bden grub といいた彼らの目を引く名称がついた〈否定対象〉を探し求めるならば、空性の真実を取り逃がしてしまう結果となる。以上が歌の意味である。

モンゴル出身の学僧アラクシャ・テンダル・ランパ (A lag sha bstan dar lha rams pa: b. 1759) はチャンキヤの『知見の歌』を踏まえて次のように述べている。

「我々にとって〈それ自身の側から成立するもの〉として、しっかりと揺らぐことなく (a 'thas su) 顕れる山、柵、家屋などそれ自体 (de ga rang) を否定するのではなしに、何らかの否定すべき『角の印』がついたものを他所に探し求めるのは甚だしく間違っている」¹⁷

ここでテンダル・ランパが主張しているのは、我々の眼前にしっかりと揺らぐことなく (a 'thas su) 顕れる山、柵、家屋といった事物にこそ真の〈否定対象〉が存在するということである。

¹³以下の議論については Nemoto 2017 でも論じた。

¹⁴Lta mgur 2b1f: da lta rang re yi blo gsal 'ga' zhig || tshugs thub bden grub sogs brda la zhen pas || snang ba lings lings de rang sor bzhas nas || dgag rgyu rwa can zhig 'tshol bar snang ste || sgrib bral a ma yi bzhin ras de na || lang lang ling ling de yod skad mi 'dug || gnad 'gags ma phigs pa'i bshad bshad mang kyang || a ma rgan mo de bro dogs 'dug go ||

¹⁵ゲデン派 (dge ldan pa) はゲルク派 (dge lugs pa) の別称である。トゥカン・ロサン・チューキ・ニマ (Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma: 1737-1802) によれば、本山ガンデン僧院 (Dga' ldan) に因んでつけられた名称である (立川他 1995: 3)。

¹⁶Tshig gi sgron me 6b3ff. に説明される。翻訳研究を参照。

¹⁷Gcig du bral gyi rnam gzhas 2b1: rang cag rnam la rang ngos nas grub par a 'thas su snang ba'i ri ra ba khang khyim sogs de ga rang dgag pa ma gtogs | 'gog rgyu rwa can zhig gzhan nas btsal na shin tu nor pa yin te | (この記述の直後にチャンキヤの『知見の歌』が引用される)

彼はチャンキヤの見解に従って、あたかも「角の印」がついているかのような、学者達の目を引く〈否定対象〉を、それらの事物とは別の所に探し求めるのは無意味であると考えている。

テンダル・ラランパは続けて次の議論を展開する。

「それに対して彼（反論者）が述べる。

それは妥当しないことが帰結する。凡夫に顕れるがままの山、柵、家屋などは感官知の把握対象であるので、それを全面的に否定するのは不適切であるゆえに。〔ツォンカパの〕毘鉢舍那大論に『感官知など無分別の知の把握様式は全て決して論理によって退けられるものではない』¹⁸と説かれるゆえに。

その通りである。しかしながら、無分別の〔感官〕知に起こる顕現の基盤（snang gzhi）であるそれは、分別による「これは実在である」という判断の基盤（rtog pas bden par zhen pa'i gzhi）である。それゆえ、その上には否定されるべき〈それ自身の側から成立するもの〉として顕れる要素（rang ngos nas grub par snang ba'i cha）と、否定されるべきではない〈単なる顕現物〉という要素（snang tsam gyi cha）の二つがある。そして、知見が獲得される以前の段階ではその二つが一つに合わさって顕現するが、知見が獲得される時、その二者は別々のものとして区別され、〈単なる顕現物〉は否定されなくなる。このような一つの重要な点があることは賢者のお言葉より知られる。それゆえ、凡夫に山、柵、家屋などが顕現する時には、それらが全面的に〈それ自身の側から成立するもの〉として顕現する顕現様式がある。それが停止し、自身の知の側において〔山、柵、家屋などの顕現が〕全面的に退けられる時、「今やその跡には何もないのだ！」といった恐怖が起こらなくなるまで修習を行わなければならない¹⁹

反論者は次のように考える。無分別の知は、分別とは異なって錯誤を離れているので、その対象は論理によって否定されるべきものではない。山、柵、家屋などは、分別を欠いた感官知の把握対象である。それゆえ、山、柵、家屋などは論理によって否定される対象とはならないのではないか。

テンダル・ラランパはこの反論に一定の合理性を認めながらも、凡夫の感官知に顕現する対象に二つの要素（cha）があることに着目し、問題解決を図ろうとしている。山、柵、家屋などの諸事物は、分別によって「これは実在である」と判断される対象であると同時に、感官知に顕現する対象である。そこには否定されるべき〈それ自身の側から成立するもの〉として顕れる要素（'gog rgyu rang ngos nas grub par snang ba'i cha）と、否定されるべきではない〈単なる顕現物〉としての要素（mi 'gog rgyu'i snang tsam gyi cha）の二つの要素がある。中観の知見を獲得していない人々にとって、その二者は一つに合わさって顕現し、相互に区別されない²⁰。真に否定されるべきものは分別による判断の内容である。否定されるべき要素とそうでない要素を区別できない初学者は、

¹⁸ Lam rim chen mo 425a6 からの引用。

¹⁹ Gcig du bral gyi nram gzhas 2b2ff.: de la kho na re | de mi 'thad par thal | so so skye bo la ji ltar snang ba'i ri rab khang khyim sogs dbang shes kyi 'dzin stangs kyi yul yin pas de nram pa thams cad du 'gog mi rung ba'i phyir te | lhag mthong chen mo las | dbang shes la sogs pa rtog med kyi shes pa'i 'dzin stangs thams cad ni nam yang rigs pas sun 'byin pa ma yin no || zhes gsungs pa'i phyir zer na | de bden mod 'on kyang rtog med kyi shes pa'i snang gzhi de rtog pas bden par zhen pa'i gzhi yin pas de'i steng du 'gog rgyu rang ngos nas grub par snang ba'i cha gcig dang | mi 'gog rgyu'i snang tsam gyi cha gnyis yod pa lta ba ma rnyed gong du de gnyis gcig tu 'dres nas snang zhing | nam lta ba rnyed pa na de gnyis so sor phyed ste snang tsam mi 'gog pa'i gnad gcig yod par mkhas pa'i gsung las grags pas | des na so so skye bo la ri rab khang khyim sogs snang ba na | de dag cha thams cad nas rang ngos nas grub par snang ba'i snang tshul yod pa de log nas | rang gi blo ngor cha thams cad nas khegs pa na da de'i shul du gang yang mi 'dug go snyam pa'i skrag pa ma skyes par du bsgom par bya'o ||

²⁰ ツォンカパによると、〈否定の主題〉（dgag gzhi）と〈否定対象〉（dgag bya）の二者は、凡夫の意識の中で相互に分ち得ない形で顕れる（Nemoto 2017 を参照）。チャンキヤとテンダル・ラランパの考えは共に、ツォンカパの見解に従うものである。

まずもって感官知に顕れる事物を〈否定対象〉とみなさなければならない。二つの要素の混在した顕現が停止すると、初学者は山、柵、家屋などが突如として存在を停止したかのように捉えて恐怖を起こす。だが、中観の正しい知見を獲得すると、二つの要素が区別されるようになるので恐怖が消え、山、柵、家屋などを実在性によって限定されない〈単なる顕現物〉として認識できる境地に達する。テンダル・ランパは[1]最初に〈否定対象〉に目を向け、[2]次にその否定の結果、恐怖を経験し、[3]さらにその恐怖を克服して、正しい知見を得るまでの三段階からなる修習を想定し、その必要性を説いている。

先に見たように、チャンキヤは、我々の感官知の対象とは別の所に〈否定対象〉を探し求めようとする他のゲルク派の学者達を批判することによって、感官知の対象にこそ〈否定対象〉があるのだという事実を目を向けさせようとしていた。しかし、これに対して「錯誤を離れた無分別の感官知の対象は否定されるべきではない」という反論が起こり得る。そこでテンダル・ランパは、感官知の対象には否定されるべき〈それ自身の側から成立するもの〉として顕現する要素と、否定されるべきでない〈単なる顕現物〉という要素があることを指摘し、中観の正しい知見によってその二要素を弁別する必要性を説き、チャンキヤの意図に沿った形で難点を回避している。

5 結語

チャンキヤ・ロールペドルジェの『知見の歌』は、空性の隠喩である〈母〉や縁起の隠喩である〈兄〉〈父〉などの比喩表現を用いて、ナーガールジュナに由来する縁起と空の一体性の真実を、以下のように解き明かした作品である。我々凡夫の知に依存してそこに顕現する事物、すなわち、縁起する事物は空性（＝〈母〉）の変容態である。ところが、凡夫は空性そのものを知覚せず、事物が自身に固有のあり方に基づいて成立すると誤認する。中観派の論理によって否定されるべき対象は「固有のあり方に基づく成立」（rang bzhin gyis grub pa）であり、それは事物と不可分のものとして凡夫の知に顕現する。その〈否定対象〉が論理によって正しく否定され、中観の知見が獲得される時、顕現する事物と空性の一体的認識が起こる。すなわち、註釈者クンチョク・ジクメワンポの表現を用いれば、「顕現と空性の連合」（snang stong zung 'jug）が認識される。一切の事物は空性の変容態であるからこそ、苦の断滅と解脱の達成が可能である。空性という〈母〉の恩恵によって人は救いを見出すことができる。

『知見の歌』は、ツォンカパの〈否定対象〉論や、縁起と空の思想を、作者自身の宗教体験に基づいて記述している点に特徴を有する。本作品はゲルク派僧院に見られる衛学的傾向とは無縁であり、それゆえに、ニンマ派やカギュ派などの他宗派の中でも広く受け入れられたと考えられる。19世紀に起こるリメー（ris med, 「宗派折衷」）運動の開花を予感させると共に、ゲルク派における中観哲学と文学の融合の極致を示す重要な作品である。

6 翻訳研究

『知見の歌』註釈《言葉の灯火》²¹

[1b1] 広大な国土における神変の示現により、幾コーティもの至高の牟尼達の眼前で、縁起についての素晴らしい教えという言葉の宴を盛大に催して下さる、かの言葉の自在者マンジュゴージャがご護り下さいますように。

偉大な智慧^{イシー}で二諦の真実をご覧になり、偉大な知性^{テンペー}で教説という勝利の旗を掲げ、偉大な悲心^{ドゥンメ}で利他行という灯火を手にする、一切の仏そのものであるロルペードルジェに敬礼する²²。

輪廻生死を粉碎する教えは、あなたの歌を通じて完成されたが、理解が困難である。その教えのために、入門し易い語釈という舟を作ることしよう。

さて、ここで比類なきイクシュヴァーク族の血統を継ぐ最高のお方、大海原のような自他の学説体系の彼岸に達することにより、一切の誉れ高い賢者達の長髪という冠の上に自らの足の爪という蓮華を^[2a1]置き、教説という宝の重荷を懸命に背負うことにおいて他に匹敵する者はなく、濁世の一切の衆生にとっての最高の守護者かつ援護者となられたお方、必要性を鑑みてお名前を申し上げれば、私の教師にして宝であられる一切智者イシー・テンペー・ドゥンメ・ペルサンボ様は、一切の内外の縁起するものを水面の月（chu'i nang gi zla ba）やまやかし（mig 'phrul）のようなものとお見抜きになり、ご自身が獲得したそのような理解を他者にももたすため、知見に関する独自の紹介の仕方（lta ba'i ngo sprod thun mong ma yin pa）を歌にしてお歌いになられた。これが本書で解説されるべき教えである。

したがって、本作品を〔解説すると〕三点ある。A1 冒頭部の意味、A2 本論の意味、A3 末尾の意味。

A1 冒頭部の意味

第一について二点ある。B1 敬礼、B2 著作宣言。

B1 敬礼

第一²³。

驚くべき甚深なる縁起の真実をありのままに包み隠さず明らかにした尊師、その恩恵は計り知れない、かのお方が私の心の中心にいて下さいますように。[1abc]

²¹本註釈に掲げられている題目は lta ba'i gsung mgur gyi 'grel pa tshog gi sgron me である。拙稿で述べたように、本作品は lta mgur（「知見の歌」）、lta mgur a ma ngos 'dzin（「知見の歌《母の認知》」）、lta ba'i gsung mgur zab mo（「甚深なる知見の御歌」）など様々な名称で知られる（根本 2017: 57）。

²²この詩節ではチャンキャが具足戒を授かった時に受けた法名イシー・テンペー・ドゥンメ（Ye shes bstan pa'i sgron me）のアナグラムがなされている。

²³ティチェン・テンパ・ラブギェは『知見の歌』の開始部に e ma ho（「エマホー！」）という句の存在を認めている。そして、e は方便である大樂（thabs bde ba chen po）、ma は智慧に等しい空性（shes rab stong pa nyid）、ho はその両者の一体化（zung du 'jug pa）を象徴し、それによって獲得対象である果の evam（thob bya 'bras bu'i e warṃ）、獲得手段である道の evam（thob byed lam gyi e warṃ）、誘引手段である徴表の evam（'dren byed rtags kyi e warṃ）の三つを表していると解釈する（Skal ldan bzhad byed 188.8ff.）。しかし、チャンキャ・ロルペードルジェ全集版は e ma ho の句を欠き、ジクメワンボの註釈、ミパムの註釈にも e ma ho の句に関する説明は見られない。ウェルマン・クンチョク・ギェルツェンが言うように、e ma ho の句は後代の付加なのであろう（Grub bzhi'i snying nor 237.14ff.）。

意味は次の通りである。「甚深」(zab mo)とは理解し難い(rtogs dka' ba)という意味である。空なるものが縁起し、縁起するものは自己に^[2b1]固有のあり方を欠いている(自性空)という真実に関して言われている。それは「驚くべきもの」(ngo mtshar ba)でもある。なぜなら「諸事物は」顕現しながらも空であり、空でありながらも顕現するからである²⁴。そのような顕現と空性の不可分性というまさにその意味をありのままに、純然なるかたちで (ma 'dres par)、包み隠さず (rjen pa) に、すなわち、鮮明に明らかにした根本尊師、その恩恵は計り知れない (bka' drin 'khor mtha' med pa)²⁵ まさにかのお方が、作者である私の心 (snying) という八枚の花弁からなる蓮華 (padma 'dab brgyad) の中心にいて下さいますように。以上のように「ロールペードルジェ師は」敬礼を述べる。

B2 著作宣言

第二。

思いつきを、湧き出るがままに二、三の言葉で語ることにしよう。[1d]

意味は次の通りである。空なるものが縁起すること (stong pa rten 'brel) の意味という「ロールペードルジェ師の」御心に思いつくもの (thugs la gang 'dran pa)、すなわち、思い浮かぶもの (shar ba) を、湧き出るがままに (thol byung gi tshul gyis)²⁶ 二、三の言葉 (tshig gsum) で語ることにしよう。「二、三の言葉」とは「幾つかの言葉」という意味であって、数的限定の意味ではない。例えば、太陽を意味する「千の光を持つもの」('od stong can) という呼称や、蓮華を意味する「百の花弁からなるもの」('dab brgya pa) という呼称が数的限定「を意味するもの」ではないのと同様である。

A2 本論の意味

第二について二点ある。B1 略説、B2 詳説。

B1 略説

第一。

かの年老いた〈母〉を長きにわたって見捨てた、狂った〈愚息〉である私は、辛うじて、共に過ごしていながら見知らぬ存在であった恩恵深い、かの〈母〉の知己を、間もなく得られよう²⁷。

かの縁起という〈兄〉がひそやかに語ってくれたことにより、押し並べて〈然り〉でありかつ〈否〉であるということが彼女の正体なのかと気づいた。[2-3ab]

²⁴ ミパムは、ここでの真実を「[そこにおいて] 顕現と空性とが不可分なものとなっている智慧」(snang stong dbyer med kyi ye shes) と解釈し、その智慧が空でありながらも「そこに諸事物が」顕現し「そこに諸事物が」顕現しながらも空であること (ye shes de ni stong bzhin du snang la snang bzhin du stong pa) を尊師は如実に明らかにしたという (Lta mgur 'grel pa 6.5ff.)。

²⁵ ミパムは 'khor med を 'khor thabs med pa (「心に思い浮かべる術がない」) の意味で解釈する (Lta mgur 'grel pa 6.8)。

²⁶ ミパムの註釈によれば、「改変することなしに」(bcas bcas med par) という意味である (Lta mgur 'grel pa 6.12)。

²⁷ 第2詩節の詩脚 d (ngo ma shes pa de shes la khad snang ngo) のみ 10 音節からなり、他の詩脚に比べて 1 音節多い変則形となっている。

意味は次の通りである。年老いた〈母〉とは心の法性 (sems kyi chos nyid) である。かの〔母〕を「長きにわたって見捨てた」とは、無始爾来、^[3a] 現在に至るまで〔心の法性を〕証得することができなかったという意味である。「狂った〈愚息〉」(bu chung snyon pa) とは知見を探し求める主体 (lta ba tshol mkhan) である心のことを指している。

その心は辛うじて (ji zhig ltar te)²⁸、単なる幸運なめぐり合わせによって (stes dbang tsam gyis)、自身が無始爾来、現在に至るまで共に過ごしていながら見知らぬ存在であった、恩恵深いかの〈母〉である法性の知己を間もなく得られよう (shes la khad par snang ngo)。

(問：) いかなる根拠あるいは論理に依拠して〔心は自身の法性を〕確定するのか。

(答：) 縁起証因 (rten 'byung gi gtan tshigs) という〈兄〉に依拠して起こる推論がひそやかに (lkog tu)、対象像 (don spyi) を通じて語ってくれたことにより、すなわち、説き明かしたことに依拠して、「吟味と考察を行なわない限りにおいて〔諸事物は〕押し並べて〈然り〉である (yin yin 'dra ba) が、吟味と考察を行なうて探し求めるならば何も把握され得るものはないという意味で〔諸事物は〕押し並べて〈否〉であり (min min 'dra ba)、固有のあり方 (rang bzhin) に基づいて存在しない」ということが、彼女の正体なのかと気づいた。

ここで空性を「母」(a ma) という名称で呼ぶことは実に理に叶っている。なぜなら般若経においても空性のことを「母」(yum) という語によって表現しているからである。

B2 詳説

第二「詳説」について三点ある。C1〈顕現と空性の連合〉(snang stong zung 'jug) によって装飾された大中観 (dbu ma chen po) の説示、C2 他の学説論者の主張の陳述、C3 自分自身が甚深なる知見を探求した方法。

C1〈顕現と空性の連合〉によって装飾された大中観の説示

第一について三点ある。D1 一切法は空なるものの変容態 (stong pa'i rnam 'gyur) であるという説への導入、D2〔一切法は〕〈顕現と空性の連合体〉(snang stong zung 'jug) であるという説への導入、D3〔作者自身の識〕相続への空性〔説〕の導入。

D1 一切法は空なるものの変容態であるという説の導入

第一について二点ある。E1 目下の主題の意味、E2 輪廻からの解脱は空性に依存するという教え。

E1 目下の主題の意味

第一。

この多様な所取・能取は〈母〉の微笑み、この生死と移ろいは〈母〉の虚言である。欺くことのない〈母〉によって私は欺かれた。かの縁起という〈兄〉が守ってくれることを願う。

[3cd-4ab]

²⁸ ミバムの註釈は、ji zhig ltar stes (「辛うじて幸運なめぐり合わせによって」) という読みを示唆する。Lta mgur 'grel pa 7.4: sems des ji zhig ltar ste zhes | stabs legs stes dbang gis | (「その心は辛うじて、すなわち、幸運なめぐり合わせによって [stabs legs = stes dbang gis]」)

意味は次の通りである。知られるべき（shes bya）—主題—は次のことである。一切法は空性の変容態である。外的な所取と内的な能取のいずれかに含まれるこの多様な縁起するものは、〈母〉なる空性の^[3b1]微笑みであり、かつこの業と煩惱の力による生や死や苦楽の移ろいなどは〈母〉なる空性の虚言として顕現するゆえに。この〔第二詩脚〕により、虚言が世間では虚偽なるものとして周知されている通りに、生死なども虚偽なるものであることが教示されている。

以上のような場合、顕現様式（snang tshul）と存在様式（gnas tshul）の対応ゆえに欺くことのないこの〈母〉、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空）は、欺きのないものであると中観論書に説かれるけれども、輪廻の中に束縛する要因である業や煩惱などが、彼女によって化作されたものであるとするならば（sprul pa ltar na）、私は欺かれたのだと思う。ただし、そのようにして欺かれるのは凡夫の場合に限ったことであって、聖者の場合にはそうではない。なぜなら彼らは空性を現証するゆえに（mngon sum du rtogs pas）輪廻生死へと引発する業（srid par 'phen byed kyi las）を新たに積むことがないからである。それゆえ、かの縁起という〈兄〉、すなわち、白業・黒業の取捨の理に従った実行に依拠して、輪廻の恐怖から守られることを願う。以上は主観的印象を語ったお言葉（nyams 'char gyi gsung）であり、考察すべき問題が多くあると思われる。

「一切法は空性の変容態である」という教えから理解される内容は次のことである。〔ある人は〕例えば壺というものを単なる名称（ming tsam）、単なる記号（brda tsam）、単なる表現（tha snyad tsam）とすることでは満足せずに、〔「xは壺である」という〕概念設定の対象（btags don）〔x〕を探し求めて考察するが、その時、いかなるものも見出さない。それゆえ、〔壺は〕自身に固有のあり方を欠くもの以外の何ものでもない。しかし、その壺は、そのように自身の側からは成立しないことを根拠として、単なる言語慣習において（tha snyad tsam du）腹部の膨らみや、水の保持などの〔行為の〕行為目的性あるいは行為主体性（bya byed）を有する縁起的存在という形で〔その人の意識に〕立ち昇る。

〔チャンドラキールティの〕『入中論』に次のように説かれる。

「それゆえ、一切の事物は、空であるけれども、まさに空なる〔別の諸事物〕を原因として生起の状態に至る」²⁹

また〔ツォンカパの〕『五次第灯明（*Rim lnga gsal sgron*）』に次のように説かれる通りである。

「したがって、遠離の^[4a1]基盤（dben gzhi）である一切の法が本来的に自身に固有の特質に基づく成立を欠いた、自性清浄を本性とするものであると確定される時、まさにその無自性であること、すなわち、空性がそれらの属性保持者（chos can）として立ち現れると確定される。そのことが、諸法は空性の変容態（stong nyid kyi nam 'gyur）であるということの意味である」³⁰

²⁹MA VI 38ab: evaṃ hi śūnyā api sarvabhāvāḥ śūnyebhya eva prabhavaṃ prayānti |（「実にこのようなことから一切の事物は、空であるけれども、まさに空なる〔別の諸事物〕を原因として生起の状態に至る」）註釈者ジャヤーナンダ（Jayānanda: 11th c.）は本詩節の内容を「空なる事物（色形など）から空なる事物（認識など）が生起する」という意味で理解している。MAṬ 160a1f. dngos po thams cad stong na yang || zhes bya ba ni rigs pas skye ba ma grub pa'i phyir nam par shes pa la sogs pa'i dngos po rnam stong pa nyid yin yang ngo || stong nyid dag las rab tu skye bar 'gyur || zhes bya ba ni gzugs la sogs pa las skye bar 'gyur ro zhes pa'o ||（「一切の事物は空であるけれども—論理に従えば生起は成立しないので、認識などの諸事物はまさに空であるけれども、まさに空なる〔別の諸事物〕を原因として生起の状態に至る—〔空なる〕色形などを原因として生起の状態に至る」）

³⁰*Rim lnga gsal sgron* 106a4f. からの引用。

E2 輪廻からの解脱は空性に依存するという教え

第二について二点ある。F1 輪廻からの解脱は空性に依存するという教え、F2 解脱の根拠（grol ba'i gtan tshigs）。

F1 輪廻からの解脱は空性に依存するという教え

第一。

その一方では、他ならぬ年老いた〈母〉の恩恵により解脱することを願う。まさにこの所取・能取がこの通りであるならば、三世諸仏でさえも救済する術はないのだから。[4cd-5ab]

意味は次の通りである。その一方では（rnam pa gcig tu na）、他ならぬ年老いた〈母〉、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空性）の恩恵により、輪廻から解脱することを願う。所取・能取に含まれるこれらの法が、我々に顕現するこの通りに成立するならば、三世諸仏でさえも救済する術はない、すなわち、救済する術を得られないのだから。

その理由は次の通りである。所取・能取である諸法が我々に顕現する通りに成立するならば、必ずそれ自身の側から成立しているはずであり、もしそれ自身の側から成立するならば、必ずそれは何ものにも依存せずに成立しているはずである。しかし、もしそうであるならば、過失が尽きなくなることや、功德が増大することはいずれもあり得ないので、解脱と一切智者の境地を得ることも不可能となる。

この理論は〔ナーガールジュナの〕『根本般若〔中頌〕』に説かれる^[4b1]通りである。

「ある人にとって空性が妥当するならば、彼にとっては一切が妥当する。ある人にとって空性が妥当しないならば、彼にとっては一切が妥当しない」³¹

F2 解脱の根拠

第二。

この多様な移ろいは、移ろうことのない〈母〉の変容態であるからこそ、解脱が可能なのである。[5cd]

意味は次の通りである。〔作者は〈母〉の恩恵により解脱することを願うと先に述べた。以下はその理由である。〕所取・能取という他ならぬこの法が我々に顕現している通りに固有のあり方に基づいて成立するならば、輪廻からの解脱は不可能であるというのは真実である。だが、この縁起している多様な移ろいは、常に移ろうことのない〈母〉、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空性）の変容態であるからこそ、〔諸事物が〕自身の側から成立しておらず、自身に固有のあり方（自性）を欠いていることを現証する智慧に依拠して、輪廻生死の根源である無明の連続を断ち切り、輪廻から解脱するのである。

D2 一切法は〈顕現と空性の連合体〉であるという説の導入

第二。一切法は〈顕現と空性の連合体〉であるという説の導入について二点ある。E1 目下の主眼の意味（dngos kyi don）、E2 空性の同定。

³¹MMK XIV 14: sarvaṃ ca yujyate tasya śūnyatā yasya yujyate | sarvaṃ na yujyate tasya śūnyam yasya na yujyate ||

E1 目下の主題の意味

第一。

何者としても成立せず言表し得ない〈母〉は何者にも化けるが、それらは彼女に依存し、彼女はそれらに依存する。この点にのみ理解すべきことがある。

老いた〈父〉を探し求めても見出されないことが老いた〈母〉を見出すことにまさに等しいのであるから、〈母〉の膝元から老いた〈父〉を見出すならば、恩恵深い父母が〈息子〉の私を守ってくれるという。[6-7abc]

意味は次の通りである。勝義（究極的智慧の対象）として何者としても成立せず言表し得ないこの〈母〉³²、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空性）が、言語活動においては多種多様な縁起的存在として何者にも化けて立ち現れる。このように、空性と縁起の二者の前者が後者に依存し、後者が前者に依存すること、すなわち、相互依存による成立（*ltoṣ grub*）というこの点にのみ良く理解すべきこと（*go rgyu*）がある。

ここにおける「理解すべきこと」とは、空なるものが縁起するものとして立ち現れ、縁起するものが空なるものとして立ち現れることを指している。すなわち、内外の縁起するものを「それ自身に固有のあり方に基づいて存在しないもの」とであると理解する知は、他の知を期待することなく、単に命名されただけのもの（*ming giṣ btags pa tsam*）について^[5a]原因・結果（*rgyu 'bras*）、定義・被定義項目（*mtshan mtshon*）、行為目的・行為主体（*bya byed*）などの一切の画定が妥当すると確定する。これが「空なるものが縁起するものとして立ち現れること」（*stong pa rten 'brel du shar ba*）の意味である。また、内外の諸事物は他に依存して仮設されたもの、すなわち、縁起するもの（*brten nas btags pa'i rten 'brel*）であると確定するその知は、他の知を期待するまでもなく、〔それらの諸事物は〕自身に固有のあり方を欠くとする、強力な確定知を誘引することができる。これが「縁起が空の意味として立ち現れること」（*rten 'brel stong pa'i don du shar ba*）である。

このような立ち現れは、正しい知見（*lta ba rnam dag*）を既に確定しておりかつ忘失していない人（*lta ba rnam dag nges zin ma brjed pa'i gang zag*）に起こるのであって、それ以外の者には起こらない。上述のように空が縁起の意味として立ち現れる時に「知見についての考察が完成する」（*lta ba'i dpyad pa rdzogs pa*）とも言われる。

ジェ・リンポチェ（ツォンカパ・ロサン・タクパ）のお言葉に次のように説かれる。

「まさに縁起の真実に偽りはないことを観察して即座に、確定知による対象の把握様式の完全消滅が、交互にではなく同時に起こるようになるならば、その時、知見についての考察が完成したことになる」³³

³² ミバムは次のように註釈する。*Lta mgur 'grel pa* 10.6ff.: *dnegos po nmams kyi gshis sam gnas lugs ni 'di'o zhes khas len dang bral te ci'i ngo bor yang grub pa med pas brjed du med pa'i a ma stong pa nyid kyi dbyings de nyid*（「諸事物の本性、すなわち、存在様態は『これである』という承認とは無縁であり、いかなるものとしても成立しないがゆえに、言表し得ない、まさにその〈母〉なる空性という基盤は…」）

³³ *Lam gtso rnam gsum* 2b3 からの引用。'*Dod 'jo'i dpag bsam* 17b1ff.: *de ltar snang ba rten 'brel dang stong pa rang bzhin gyis med pa gnyis gcig snang dus na cig shos snang dka' bar song ba'i gang zag de nam zhig rten 'brel snang ba dang stong pa snang ba gnyis res 'jog med par gzhi gang gi steng du yang snang stong cig car du 'jog thub pa'i rten 'brel mi bsu bar mthong ba tsam gyi blo de nyid kyi mthu la brten nas stong pa la nges pa 'dren nus pa'i shes pa des l bden 'dzin gyi yul gyi gtso bo rang bzhin gyis grub tshad dang 'dzin stangs kun 'jig par 'gyur ba na de'i tshe gang zag de lta ba'i dpayd pa rdzogs pa'i tshad lags te l de tshe rang bzhin gyis stong pa'i rgyu mtshan gyis bya byed thams cad bsnyon med du bzhag chog pa'i snang stong gnyis tshogs de gzod byung ba yin pa'i phyir ro l l*（「かくして、縁起する現象と、空であり自性を欠くということの二者の内、一方が顕現する時に、他方が顕現することを困難としている人がいる。その人が、縁起の顕現と空の顕現の二者を交互に〔立てるの〕ではなく、いかなる主題に関しても、現象と空を同時的に立てることを可能にする縁

また、ケードゥブ・ノルサン・ギャンツォ³⁴も次のように説いている。

「知見についての考察が完成する時、感官知である識（*rnam par shes pa dbang po'i shes pa*）に各々の対象の顕現物が立ち現れることのみによって、他の論理や根拠を期待することなく、自身の対象を『空である』と確定する確定知が誘引される。

例えば視覚器官（眼根）が害された人は『二重の月は存在しない』という生来的な知識の力により、たとえ眼に二重の月が顕現しても、まさにそれによって『二重の月は存在しない』という確定を誘引する。

それと同じように『空である』という確定が起こる時、業やその果などといった言語慣習における一切の存在は、いかなる存在様式を具えるのかと思考するならば、単なる名称に過ぎない仮設有として措定される」

さらにまた、^[5b1] 我らが最高指導者であられる偉大なるゲルワン（ダライ・ラマ）七世の御歌（*gsung mgur*）にも次のように説かれる。

「光り輝く空性という天空の側に不変のものは真実には存在しないが、因縁に依存して成立する多数のものが集合してできた虹という絵の中には、捉え所もなく（*gtad med*）あらゆるものが立ち現れる。この不可思議を見よ。

考察するならば『これだ』と確認できるものは何もないが、多数の因縁や部分に対して仮設されたこの名ばかりの存在において一切の行為目的性と行為主体性が妥当する。この幻術をご覧あれ」

以上、これらの善説に依拠して、空性と縁起の二者を同一基体（*gzhi gcig*）のもとにそれぞれ手段と目的（*thabs dang thabs byung*）として措定する仕方について確信を得るが良い。ある者は「もし〔ある人が〕知見を得るならば〔その人は〕必ず知見に関わる考察を完成した者である」（*lta ba rnyed na lta ba'i dpyad pa rdzogs pas khyab*）というが、上記の要点を理解していないことによる当て推量（*'ol tshod*）であると思われる。

〔詩節中の〕「老いた〈父〉」という表現は、空性と関係する空の基体である主題（*stong pa nyid kyi stong gzhi chos can*）を意味する。「*x*」という概念設定の対象（*de'i btags don*）を探し求めても見出されないことが、老いた〈母〉、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空性）を見出すことにまさに等しいのであるから。以上は、主題から法性を求めて見出す仕方（*chos can las chos nyid rnyed pa'i tshul*）である。次に〈母〉、すなわち、自身に固有のあり方の欠如（自性空性）の膝元（*pang*）、すなわち、領域（*dbyings*）から、他ならぬ老いた〈父〉、すなわち、空の基盤である主題を見出した。以上は、法性から主題を求めて見出す仕方（*chos nyid las chos can rnyed pa'i tshul*）を表現している。

以上のようなことから、かの老いた〈父〉である縁起と、老いた〈母〉である空性の二者は、相互に対立することなく立ち現れることによって、幼い〈息子〉の私を常断の二辺から守ってくれる。

起の真実に偽りはないことを観察するだけのことを行なうまさにその知の力に依拠して、空であることについて確定を導き出すことのできるその知によって、実在に対するとらわれの対象の主たるものである自性に基づいて〔諸事物が〕成立することを示す指標と把握様式が完全に消滅するならば、その時こそ、その人が正しい知見についての考察を完成したことを示す指標となる時である。なぜなら、その時、自性を欠くことを根拠にして、一切の行為目的性・行為主体性を、議論の余地なく措定して構わないのだという考え、すなわち、かの現象と空の二者の集結が初めて起きたことになるからである」

³⁴ ケードゥブ・ノルサン・ギャンツォ（*Mkhas grub nor bzang rgya mtsho*: 1423–1513）は『カーラチャクラ・タントラ』に対する浩瀚な註釈（*Kilty 2001* による英訳がある）の著者として知られるゲルク派の学者である。現時点では引用詩節の同定はできなかった。

E2 空性の同定

第二「空性の本性の同定」について次のように説かれる。

一でもなく他でもない〈母〉の尊顔は、縁起という〈兄〉の鏡の中に、捉えようのない形で存在している^[6a1] ようだ。狂人である私のような者はこれまで分析を行なうこともしなかった。
[7d-8abc]

それ自身の空の基体 (stong gzhi) と同一でもなく、それとは他なった本質を持つものでもない空性という〈母〉の尊顔、すなわち、自身に固有のあり方に基づく成立を排除したのみのもの (rang bzhin gyis grub pa bca'd tsam) であるその絶対否定 (med dgag) は、縁起という〈兄〉の証因に依拠する推理知という鏡の中に、勝義として捉えようもない (zin pa med = 'dzin pa med) 形で存在しているように見える ('dra ba snang)。狂人である私のような者は、今に至るまで (da snga phan)、分析を行なうこともしなかった。以上は謙遜〔表現〕 (khengs skyungs pa) である。

D3 作者自身の識相続への空性説の導入

第三について二点ある。E1 目下の主題の意味 (dngos kyi don)、E2 ある自派（ゲルク派）の信奉者 (rang re'i rjes 'brang) の誤解の否定。

E1 目下の主題の意味

第一。

ナーガールジュナとチャンドラキールティが風に流した遺言と、ジャンペル・ニンポ（ツォンカバ大師）が放った鳥を頼りにして、〔私は〕遙か彼方に〔〈母〉を〕探し求める難行をやめ、〔実際には〕共にいる年老いた〈母〉にまみえることを願う。[8d-9abc]

意味は次の通りである。守護尊ナーガールジュナと有徳チャンドラキールティが風に流した遺言³⁵のような六つの理論書（『根本般若中頌』『六十頌如理論』『空七十論』『廻諍論』『ヴァイダリヤ論』『宝行王正論』）、『明句論』、『入中論』等、並びに尊者ジャンペル・ニンポ（ツォンカバ大師）³⁶がお作りになられた『中論大註』、『入中論大註』、『善説真髓』によって放った鳥に依拠して、遙か彼方に探し求める難行をやめ (bshol ba = bzhag pa)、自己の識相続と共にいる年老いた〈母〉である空性というこの美しい尊顔にまみえることを望む。

³⁵ ミパムによれば「風に流した遺言」という表現は師資相承によって伝授された教えを意味する。Lta mgur 'grel pa 12.8ff.: de lta bu'i skabs su klu sgrub dang zla ba grags pa'i rang gi dgongs pa ji lta ba bzhin tu bstan pa'i zhal chem rigs tshogs dang 'jug pa sogs kyi tshig dang man ngag ma nor ba de nyid skyes bu dam pa gcig nas gcig tu bgyud pa'i mgrin pa'i rlung la bskur ba lta bu de rang gi skal bar thob pa zhes [...] (「そのような状況にあつて、ナーガールジュナとチャンドラキールティのご自身のお考えをありのままに教示した遺言、すなわち、六つの理論書や『入中論』などの過誤のない言葉と教え、すなわち、一人の偉大な者から別の偉大な者へと継承される喉〔から発せられる〕風に流した〔遺言〕のようなもの、それを〔作者は〕幸運にして得た」)

³⁶ ケドゥブジェによって著された『秘密伝』によると、ジャンペル・ニンポとは、ツォンカバが来世で兜率天に往生した時の名前である。Gsang ba'i rnam thar 3b6ff. (cf. 石濱・福田 2008: 181): bla ma dbu ma pas rje btsun 'jam pa'i dbyangs la l' rje rin po che 'di'i sku skyes snga phyi sogs kyi zhu ba mdzad pas [...] da sku skyes 'di'i phyi ma la dga' ldan du rgyal ba ma pham pa'i chos kyi mdun sar theg pa chen po'i 'byor pa dpag tu med pa la longs spyod par 'gyur zhing l mtshan la byang chub sems dpa' 'jam dpal snying po zhes bya bar 'gyur ro l l zhes zer ro l l (「ラマ・ウパは尊者マンジュゴーシャに、このジェ・リンポチェ〔ツォンカバ大師〕の前世や来世などについての質問をなされた。すると〔マンジュゴーシャは〕『…〔中略〕…今生の次には兜率天においてマイトレーヤ勝者の法の集会にて、大乘という無量の財産を享受し、その名をジャンペル・ニンポ菩薩と称する者となるであろう』と言った」)

E2 ある自派(ゲルク派)の信奉者の誤解の否定

第二。

昨今、我らの中のある聡明な者達は **tshugs thub** や **bden grub** などの^[6b] 術語を愛好する。彼らはそのきらきらと顕れているものを放置し、角の印がついた否定対象を探し求めているようだ。

覆い隠すものを離れた〈母〉のその尊顔に、そうしたきらきら光るものがあるという話はない。重要な点を外してあれこれの説明をつけたものは多くあるが、かの年老いた〈母〉は逃げてしまったのではないかと疑われる。

「諸存在は」あることはあるのだが、今のこのような、ごつごつした矛盾の集まりを抱えたものであるとは思われない。むしろ、〈父〉と〈母〉は愛情によって離れることなく、のんびりして、実に穏やかで実に幸せそうに見える。[9d-12c]

意味は次の通りである。昨今、我らゲデン派(dge ldan pa)のある聡明な理論家(rigs pa smra ba)は、僧院教本(yig cha)に説かれている限りのこと(bshad tshod)に依拠して、**tshugs thub** (「不変性」)や**bden grub** (「実在としての成立」)——「など」という語に含まれるのはrang bzhin gyis grub pa (「自性に基づく成立」)やrang ngos nas grub pa (「それ自身の側からの成立」)である——といった術語をあまりにも著しく愛好している。彼らは否定対象の範囲を確認する時、「今、我々の前に顕れている通りのこのきらきらしたもの(ling ling po)を否定する必要はない」と考えた上で放置し(rang sor bzhag nas)、それとは別の所に、まるで角の印がついている(rwa can)³⁷ような否定対象を探し求めることに腐心しているようだ。

二顕現という覆い隠すものを離れた〈母〉、すなわち、空性を直接知覚で証得する智慧³⁸のその尊顔、すなわち、把握様式の側('dzin stangs kyi ngo)において、今顕れている通りのこのようなきらきら光るもの(lang lang ling ling po)があるという話はない。空性に関する難解であるが重要な点を外し(ma phigs pa)、よく分析することなく(ma phyed par)あれこれの説明をつけたものは多くあるが、かの年老いた〈母〉である空性はよそに逃げてしまったのではないかと疑われる³⁹。

[問] ならば[実際には] どうか。[答] 一般に、諸存在はあることはあるのだが、知見についての考察を完成した人の観点から見れば、今我らに不変のもの^[7a]として顕れるこのような鹿の角のようにごつごつした(rong rong)矛盾の集まりを抱えたものであるとは思われない('gal 'du can zhig ni yin tshod du mi snang)。むしろ、〈父〉と〈母〉、すなわち、空性と縁起の二者は愛情で結ばれ、一方が他方を見捨てることはあり得ないゆえに、離れることなく、のんびりしているので、実に穏やかで('jam 'jam) 実に幸せそう(skyid skyid)に見える。

略号と文献

(1) インド撰述文献

MA *Madhyamakāvatāra* (Candrakīrti): (1); (2) L. de la Vallée Poussin ed. *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti, Traduction Tibétaine*. Bibliotheca Buddhica IX. St. Petersburg. Reprint, Osnabrück. 1970.

³⁷ ミパムによれば「角の印がついた」(rwa can) というのは、不本意なる思いを表す表現(ma rangs pa'i tshig)である(*Lta mgur 'grel pa* 13.13)。

³⁸ ここでは〈母〉は空性(stong pa nyid)ではなく、空性を直接知覚で証得する智慧(stong pa nyid mngon sum du rtogs pa'i shes rab)を表す隠喩である。

³⁹ ミパムによると「〈母〉は逃げてしまったのではないかと疑われる」というのは、非常に不本意なる思いを表す表現(shin tu ma rangs pa'i tshig)である(*Lta mgur 'grel pa* 15.10)。

MAT *Madhyamakāvatāraṭīkā* (Jayānanda): Sde dge ed. *Dbu ma* Ra. Tohoku No. 3870.

MMK *Mūlamadhyamakakārikā* (Nāgārjuna): 叶少勇 Ye Shaoyong ed. 『中論頌梵藏漢合校・導讀・訳注』上海：中西書局. 2011.

VV *Vigrahavyāvartanī* (Nāgārjuna): E. H. Johnston and A. Kunst ed. “The Vigrahavyāvartanī of Nāgārjuna with the author’s commentary.” *Mélanges chinois et bouddhiques* IX: 99–152. 1951.

(2) チベット撰述文献

Skal ldan bzhad byed *Bdag 'dzin dgra dpung 'joms pa'i mtshon cha skal ldan padmo bzhad pa'i nyin byed* (Khri chen bstan pa rab rgyas). In *Blo bzang dgongs rgyan mu tig phreng mdzes deb bzhi bcu pa* (pp. 187–205). Mundgod: Drepung Loseling Educational Society. 1999.

Grub bzhi'i snying nor *Lta ba'i nyams mgur thun mong ma yin pa a ma ngo shes kyi rnam bshad grub mtha' bzhi'i snying nor* (Bstan pa bstan 'dzin): In *Gsung rtsom phyogs bsgrigs mu tig do shal*, vol. 1. Mundgod: Drepung Gomang Library. 2004.

'Grel chung *Lta mgur 'grel pa* (Mi pham 'jam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho): *Mi pham gsung 'bum las gzhung 'grel skor*. Za. Khreng tu'u: 'Jam dpal dhī yig ser po'i dpe skrun tshogs pa. 2008.

Gcig du bral gyi rnam bzhas *Gcig du bral gyi rnam bzhas legs bshad rgya mtsho las btus pa'i 'khrul spong bdud rtsi'i gzebs ma* (A lag sha bstan dar lha rams pa): Collected Gsung 'bum of Bstan-dar Lha-ram of A-lag-sha. (Ka-Na). New Delhi. 1971.

Lta mgur *A ma ngo shes kyi brdzun tshig brag cha'i sgra dbyangs* (Lcang skya rol pa'i rdo rje): *Lcang skya rol pa'i rdo rje'i gsung 'bum*. Nga. Beijing: Krung go bod brgyud mtho rim nang bstan slob gling nang bstan zhib 'jug khang. 1995.

'Dod 'jo'i dpag bsam *Lam gyi gtso bo rnam gsum gyi 'grel pa 'dod 'jo'i dpag bsam* (A lag sha bstan dar lha rams pa). Sku 'bum byams pa gling ed. Tha.

Bang mdzod *Rten 'brel bstod pa'i 'fikka legs bshad nor bu'i bang mdzod* (Lcang skya rol pa'i rdo rje): *Lcang skya rol pa'i rdo rje'i gsung 'bum*, Kha. Beijing: Krung go bod brgyad mtho rim nang bstan slob gling nang bstan zhib 'jug khang. 1995.

Tshig sgron *Lta ba'i gsung mgur gyi 'grel pa tshig gi sgron me* (Dkon mchog 'jigs med dbang po): Bkra shis 'khyil ed. Ja.

Rim lnga gsal sgron *Rgyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man ngag rim pa lnga rab tu gsal ba'i sgron me* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Ja. Tohoku No. 5302.

Lam gtso rnam gsum *Lam gyi gnad gsum bstan pa* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Kha. Tohoku No. 5275 (67).

Lam rim chen mo *Khams gsum chos kyi rgyal po tsong kha pa chen pos mdzad pa'i byang chub lam gyi rim pa chen mo* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Pa. Tohoku No. 5392.

Gsang ba'i rnam thar *Rje rin po che'i gsang ba'i rnam thar rgya mtsho lta bu las cha shas nyung ngu zhig yongs su brjod pa'i gtam rin po che'i snye ma* (Mkhas grub rje dge legs dpal bzang po): Zhol ed. Ka. Tohoku No. 5261.

(3) 欧文・和文資料

Kilty 2001

Nemoto 2017 Nemoto, H. “Tsong kha pa *et al.* on the Object of Negation (*dgag bya*).” *Tetsugaku* 69: 95–105.

石濱・福田 2008 石濱裕美子、福田洋一 『聖ツォンカパ伝』大東出版社

立川他 1995 立川武蔵、石濱裕美子、福田洋一『西藏仏教宗義研究』第七巻「トゥカン『一切宗義』ゲルク派の章』東洋文庫

根本 2016 根本裕史『ソオンカバの思想と文学—縁起讃を読む—』平楽寺書店

根本 2017 同「チャンキャ・ロールペードルジェ『知見の歌』研究序説」『比較論理学研究』14: 57–68.

(ねもと ひろし、広島大学 [インド哲学])

Appearance and Emptiness: A study of the *Lta mgur* (1)

Hiroshi Nemoto

Lcang skya rol pa'i rdo rje's *Lta mgur* is a work that vividly expresses the truth of dependent origination (*rten 'byung*) and emptiness (*stong pa nyid*) of the Madhyamaka school by using metaphorical expressions like “mother,” which is for emptiness, and “brother” or “father,” both of which are for dependent origination. According to him, an entity that arises dependently on others and appears in the mind is the transformation (*nam 'gyur*) of emptiness or “mother.” Ordinary people, however, do not perceive the emptiness of an entity and hence wrongly understand that it is established by its own being. What is to be negated is a thing's establishment by means of its own being (*rang bzhin gyis grub pa*), which appears in the minds of ordinary people as something inseparable from that thing. The negation of the object of negation through reasoning enables one to attain the Madhyamaka insight, on the basis of which the cognition of an entity that entails the cognition of emptiness is obtained. It is at this moment that the union of appearance and emptiness (*snang stong zung 'jug*) is cognized. Lcang skya rol pa'i rdo rje emphasizes the point that it is precisely because every entity is the transformation of emptiness that abandonment of suffering and liberation from *samsāra* are possible. He says that one can find salvation only with the benefit of “mother,” namely, emptiness.

The characteristic feature of the *Lta mgur* is that it describes such topics as the nature of the object of negation, the union of appearance and emptiness, etc., which are extensively discussed by Tsong kha pa, on the basis the author's own personal experience. The highly sophisticated scholasticism that is characteristic to the Dge lugs pa's monastic universities is alien to the *Lta mgur*. This is probably the reason that it has been widely accepted in both Dge lugs pa and non-Dge lugs pa schools. We may say that this is the work that embodied the unity of the Madhyamaka philosophy and poetic literature of the Dge lugs pa tradition, and also that triggered the non-sectarian (*ris med*) movement flourishing in the nineteenth century.